『日本アジア研究』第6号（2009年3月）

現代日本語の意味・用法の広がりに関する記述的研究
——多機能化，フィラー，フィラー化——

小出慶一*

本研究のテーマは次のようなものである。①多機能化の動機付け，その変化の方向はどのようなものか。多義化，文法化が予想する方向（命題内容表現＞テキスト機能＞モダリティ表現）と同じ方向にあるのか。②多義化，文法化，多機能化のほかに，語の意味機能の変容のあり方にはフィラー化があるが，フィラー化についても同様に動機付け，変化の方向が認められるか。

取り上げた項目は，多機能化については用法の変化の大きいとされる「的」「ぽい」，助詞「も」，それにその中間的な位置にある「本」の4つの機能語。フィラー化に関しては，出力系のものの中から使用頻度順に「あのー」「そのー」「このー」「こう」「まあ」「もう」「なんか」「もう」「えーと」「えー」の9語を取り上げた。

これらの語について検討した結果，次のような観察を得た。

まず，機能語の多機能化には，その機能語が用言的な性格を持っていることが要件であることが観察された。用言性機能語は，さらに，前接要素の統語範疇が変化することによって用法を拡大する。非用言性機能語の場合，「も」は取立詞としての範列暗示に関して，自己の外部要素暗示から，自己フレーム内への拡大を見せる。また，「本」は，具体的なモノを数える助数詞から，ヒトの社会活動に含まれる顕著なものを数える助数詞へと拡大する。この2語に共通するのは，統語的な拡大がないという点である。意味的な面でも，適用範囲の基本的なカテゴリは変わらない。それに対して，用言性機能語の場合は，それ自身の統語的，談話的な機能の拡大を見せる。そして，機能拡大の動機付けには，認知的なものと，社会的なものとが認められる。認知的な動機付けとは，モノゴトを主体化して捉えようとする欲求に基づくもの，主体自身の表現欲求に基づくものがあり，いずれも主体の露出を動因としている。社会的な動機付けというのは，対人的な配慮であり，「僕的には」「昨日来たっぽい」など，ネガティヴ・ポライトネスに基づくものである。用法の拡大の方向は，通説に従うものであるが，語の性格と拡大との関係について新しい観察を示した。

次に，フィラー化について。まず，フィラーの出自に関しては2つのタイプがある。派生系と専用系である。派生系とは副詞「まあ」や指示詞「あのー」などから派生したものを指し，専用系とは「えー」「えーと」などフィラーのみに使われるものである。機能という点では，前者（派生系）は，発話内容の源泉，発話内容に対する話し手の姿勢を示す。それに対して，後者（専用系）は，発話内容形成のための心的スペースを作るためのものである。派生系のものは，対人的な調整機能をも合わせて持つ。さらに慣習化すること

* こいで・けいいち，埼玉大学教養学部教授，日本語教育

によって，談話標識化する場合もある。派生系フィラーは自立要素が変化したものであるが，モダリティ副詞などのように，もともとは文内に何らかの呼応要素を持っていたものである。その呼応関係が緩くなり，更には呼応が消失することによって文内の位置づけを失い，フィラー化するのではないかと思われる。また，これらの語には，副詞にしろ，指示詞にしろ，もともと外界に指示対象を持たないものという共通点があるが，フィラーの重要な機能として，話し手にとっては，発話内容の要素となることではなく，発話形成の支援をすることが指摘できる。しかし，フィラーの中には独り言に現れないものもあり，それは，内容の大まかな予告という形で，対人的な調整を行うという機能も持つという面も持っているのである。この点では，フィラー化も多機能化も，その変化の動機付けには，対人コミュニケーションにおける調整という共通のものが見出されることになる。
キーワード：意味・用法の広がり，フィラー，フィラー化

第 1 部　機能語の用法の変化

1　はじめに

1.1　本研究のテーマ

本研究は，第 1 部，第 2 部と 2 つの部分からなるが，全体のテーマは次のようなものである。①は主として第 1 部，②は第 2 部のテーマである。

① 多機能化というものは，機能語がさらに別の機能を持つ機能語へと変化することであるが，そのような変化について，それを可能にする条件，動機付けを検討し，その変化の方向は，多義化，文法化が予想する方向（命題内容表現＞テキスト機能＞モダリティ表現（ホッパー & トラウゴット 2003）と同じ方向にあるのか。

② 多義化，文法化，多機能化のほかに，語の意味機能の変容のあり方として，フィラー化というものを挙げることができると思われるが，このフィラー化についても同様に，それを可能にする条件，動機付け，その変化の方向は，やはり多義化，文法化の予想する線上にあるのか，もしそのような線上にないとすれば，どのような方向を考えればよいか，なぜそのような方向が志向されるか。

多義化，多機能化，フィラー化という 3 つの領域に共通する主たる関心を挙げれば，次の 3 つである。

1　このような複数の意味が生まれる要因はどのようなものか
2　意味の広がる動機付けはどのようなものか
3　このような複数の意味の関係はどのように把握されるか

1.2　本研究の対象と構成

本研究は，次のような構成となっている。

第 1 部　機能語の用法の広がり（多機能化）

非用言系接辞　助数詞（類別詞）「本」，取立て助詞「も」
用言系接辞　　形容動詞性接辞「的」，形容詞性接辞「ぽい」
第2部　フィラーとフィラー化
入力系　専用系　「あ」(「え」)
出力系　専用系　「えーと」「えー」
派生系　指示詞由来「あのー」「そのー」「このー」「こう」
　　副詞由来　「まあ」「なんか」「もう」

第1部では多機能化をめぐって，第2部では本研究で呼ぶところのフィラー化について述べる。

ここで扱う項目の選択に関しては，次のような理由によっている。まず，第1部で扱う項目であるが，いわゆる機能語は多くのものがあるが，その中で近年の機能用法の変化の大きなものとして議論されることの多い「的」，「ぽい」の2つ，古典日本語から連綿として使用され続けている助詞「も」，この両者の中間的なものとして，類別詞の中では比較的使用頻度が高く意味の広がりの大きいといわれる「本」，この4つを取り上げることとした。また，第2部で取り上げるフィラーに関しては，「インタビュー形式による日本語会話データベース」(北九州市立大学)[1]および先行研究での調査(野村 1996, Nagura 1997, 山根 2002）での使用頻度の高いものから9語「あのー」「そのー」「このー」「こう」「まあ」「もう」「なんか」「もう」「えーと」「えー」を取り上げた。また，これら出力系フィラーの性格を考えるために，入力系フィラー「あ」「え」についても考察した。

以下，第1部では上に述べた4つの機能語の意味・用法の広がりについて，検討結果の要旨を述べる。なお，紙幅の都合で，先行研究への言及は最小限に止める。

2　助数詞「本」について

用例の観察の結果，「本」の用法は次の6つの類に分けられた。各類の特徴を簡単に言うと次のようになる。「本」で数えられる事柄の例を「　」に挙げる。なお，分析対象としたデータは「佐賀新聞記事データベース」(2001～2002年のもの）によった。

1.「本」の用法の6つの類
A：細長い具体物
「えんぴつ，たばこ，釘，指，ギター，ズボン，橋」
B：軌跡を描いて移動するものを含む人の活動に含まれるもの
「ホームラン，シュート，サービスエース，スキージャンプ」
C：人の創造的な活動から生まれた一続きのもの
「論文，連載小説，映画，法案，電話」
D：限られた期間で完結する職業的活動
「仕事，自主事業，ライブコンサート」

[1] (http://www.env.kitakyu-u.ac.jp/corpus/)

E：競争的，競合的あるいは多くの努力を要する活動に含まれるもの
「当たりくじ，決まり手／勝ち，契約，（苦情）」
F：商業活動，武道など活動性の高い活動に含まれるもの
「束ねられた古本，露店，剣道の基本技」

これらが，どのように用法を広げていくかを見ると次のようになる。

2.「本」の用法の広がり

①A：一次元的な伸びを持った単体　（*エンピツ，バット*）
↓
B：人の活動に伴い，起点終点を持つ，軌跡のイメージ（*ヒット*）
↓
②C：人の活動に伴い，起点終点，時間的な長さを持つ作物（*映画，論文*）
↓
D：時間的な長さとまとまりを持つ人の活動　（*短期的事業，仕事*）
↓
③E：人の活動に含まれる顕著なもの　（*賞金，当たりくじ*）
↓
F：人の活動に含まれるもの　（*商品，古本の束*）

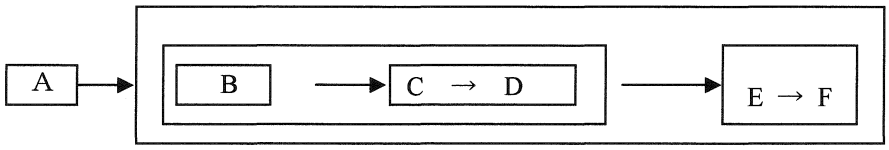
この広がりを，対象の属する領域という観点から見ると，さらに，①，②，③という 3 つの領域にまとめることができる。①②③内の意味的な広がりの方向は次のようになる。

3.「本」が使われる領域

①空間的な長さを持つもの。一次元性の伸びを持つもの。
A→B に移るに伴って，具体性を弱める。
②時間的な長さを持つもの。
C→D に移るに伴って，一次元性を弱める。
③人の競合的活動に含まれるもの。
E→F に移るに伴って，顕著性を弱める。

ここで見出される重要な点は，「本」が，人の活動というものを捉えるべく用法を広げているということである。対象の領域は，3 に見るように，①空間，②時間，③活動という領域であるが，それは人にとって意味のある空間・時間・活動である。このような観察を踏まえて，A→F 広がりを図式化すると次のようになる。

4.「本」の用法の広がりのモデル



先行研究（たとえば，松本 1991，深田 2000）では，A～D までの広がりに

関する記述がほとんどで，E，F への広がりについては，これまであまり言及されて来なかった。A〜D までの広がりには程度の差はあれ，イメージ・スキーマのかかわりを認めることができると思われるが，E，F への移行はイメージ変換だけでは成立しない。この広がりの背景にあるのは人間の有界的活動への関心（池上 2000）であり，より抽象段階の高いカテゴリ形成能力の発動だろうと思われる。

3　取立て助詞「モ」について

「モ」の基本的な機能は次のようなものである。

5.「モ」の基本的な機能
モの付された要素が，それと類似性を持つ範列的な集合の存在を暗に示すこと。ただし，これは，場合によって，意外性表示としても機能する。

この基本的な機能は，次のような 4 つの用法となって実現される。

6. モの用法
モ 1：類似事態の存在が明示されているモ
友人は意外にうまそうに喰っている。（中略）私は黙ってそれを眺めていた。そのうち，ふっと，俺<u>も</u>食べてみようか，という気になった。（色川武大「大喰いでなければ」）
モ 2：類似事態の存在を暗示するモ
（朝，雨戸を開けて外を見て）
ああ，今日<u>も</u>雨か。
モ 3：フレーム内の類似事態を取り出すモ
田中は泣き<u>も</u>した。わめき<u>も</u>した。
今年の夏は楽しかった。山に<u>も</u>登ったし，海に<u>も</u>出かけた。
モ 4：「柔らげ」のモ[2]
夜<u>も</u>ふけてまいりました。
人間<u>も</u> 50 になっちゃおしまいだ。

それぞれの性質は次のようになる。

7. モ 1 とモ 2 の性質
a. モ 1 は範列的な関係にある要素が先行文脈に明示されているもので，モ 2 は文脈にないものである。モ 2 の範列要素の所在場所は，状況，文脈，知識内などいくつかの可能性がある。
b. また，モ 2 の使用は義務的ではない。話し手が類似事態のあることを認識し，表現することによってはじめてモが出現する。その点では談話上の制約は義務的ではない。

---

[2] 「和らげのモ」という用語は沼田（1986）のものを借りているが，以下に述べるように必ずしも分析の内容は同じではない。また，定延（1991）では「当たり前のモ」「通念のモ」などとも言われるが，いずれも分析は異なる。

8. モ 3 の性質

a. モ 3 でも，先行文脈内に類似要素は存在しない。

b. モ 3 は，「X も」という句における X の範列要素表示をするものではなく，「X も Y」という事態全体を含む上位フレームに範列要素のあることを示すものである[3]。

9. モ 4 の性質

a. モ 4 では，範列要素は，「X モ」の X の中にあって，外部にはない。「自己フレーム」の中に存在する。モ 1〜3 が自己外の要素を範列要素としたことと大きく異なる点である。6 の「夜も更けて〜」では，「夜」と並ぶ範列要素はなく，「夜」のさまざまな局面が範列要素となっているのである。

b. また，モ 4 には「X も Y が Z」という形式が存在し（「宴も今がたけなわ」），X が範列要素の所在地を示す。

このような機能を，次の 3 点で整理したものが 10 の表である。

A：なぜ類似を表現するか

B：類似（範列）要素はどこにあるか

C：機能はどのようなものか

10. モの機能

	A 類似性表現の契機	B 類似要素の所在	C 機能
モ 1	類似要素の認識	先行文脈	類似要素表示（モの義務的付加）
モ 2	類似要素の認識	上位フレーム	類似要素暗示
モ 3	フレーム属性の認識	上位フレーム	フレーム属性表現
モ 4	類似要素の認識	自己フレーム	新規要素の累加／発見の表示

これらの機能の広がりを図式化すると次のようになろう。

11. モの機能の広がり

モ 4　自己フレーム←――　内要素参照

モ 1　文脈内の明示された類似要素参照
↓　（カテゴリ認識）
モ 2　上位フレーム内の類似要素参照
↓　（カテゴリの属性の把握）
モ 3　上位フレームの属性表現

「モ」の広がりは，類似要素の探索範囲の広がりとして捉えることができると思われる。機能という点での変容は見られない。実世界の把握のために広がるのではなく，範列関係にどのようなコトガラを取り込むかという認識のありようを示すのが「モ」の機能である。助数詞「本」が行ったような外界のカテゴリ化というようなことはしない。

---

[3] 益岡（1990）では異型命題を範列とするとされている。

先行研究（沼田 1986，定延 1991 など）では，モ 4 の位置づけが明確ではなかったように思われる。その結果，「モ」の用法の広がりが，統一的に捉えられなかった。自己フレームというものを設定することでモ 4 の位置づけが明確になったのではないかと思われる。

いずれにしても取り立て助詞という性格から離れることはないが，ことがらの関係認識のあり方，蓄えられた知識の再編を行うという方向で，主体としての営みを表現することになっているのではないかと思われる。

4 「的」について

4.1 「的」の従来の用法について

本研究では，「X 的 Y」という形での，X，Y の実体性（指示対象の具体性）という観点から，次の 4 つに区分した。

12.「X 的 Y」の X，Y の実体性による区分

	X	Y	例
α	実体	実体	熱帯的気候，ドイツ的ビール，日本的食品
β	実体	非実体	動物的直観，男性的魅力
γ	非実体	実体	熱狂的ファン，独裁的指導者
δ	非実体	非実体	精神的支援，例外的見直し

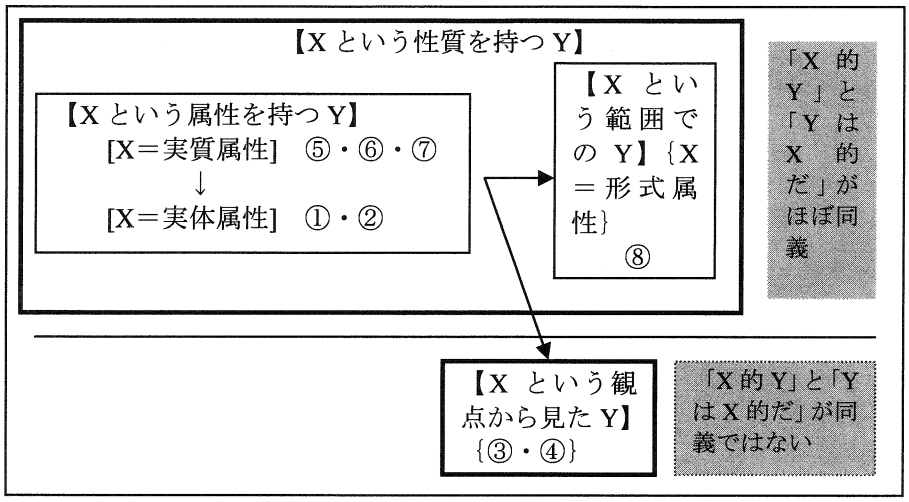
そして，α～δ の用法について，X と Y の意味関係に基づいて，さらに以下のような区分を行った。

13.「X 的 Y」における X と Y の意味的な関係

α 類	①〈X の持つ属性を持つ Y〉	「熱帯的気候	ドイツ的ビール」
β 類	②〈X が持つであろう Y〉	「動物的直観	男性的魅力」
β'類	③〈X についての Y〉	「形態的特徴	構造的不均衡」
	④〈X という領域での Y〉	「精神的支援	経済的満足」
γ 類	⑤〈X という性質を持つ Y〉	「熱狂的ファン	独裁的指導者」
δ 類	⑥〈X という性質を持つ Y〉	「例外的扱い	根本的見直し」
	⑦〈X という仕方での Y〉	「平和的解決	挑戦的発言」
	⑧〈X という範囲での Y〉	「部分的修正	全国的人気」

これらの関係は次のように捉えられるのではないかと思われる。

14.「X 的 Y」の意味の広がりのモデル



この用法の広がりの中で重要な点は，「X という観点から見た Y」（上図の③・④）という用法が成立している点である。これが以下に述べる新用法につながるのではないかと思われる。

4.2 「的」の新しい用法について

これらの用法に対して，近年，「わたし的には」のような新用法が出現している。上に述べた用法と比較すると，この新用法について次のような特徴が指摘できる。

15.「的」の新用法

1）従来の用法での「X 的 Y」の意味は，X の実体性の有無，高低によって変化する。実体性の高い場合は，「ドイツ的ビール」→「ドイツのビール」のように「X の Y」への読み替えが可能であり，X の持つ属性を Y が持つという意味表す。それに対して，X の実体性が低くなると，「例外的扱い」の「例外」のように，X はそれ自体としての多様な属性を持たずに，単なる性質の表示のみを行うようになる。

2）新しい用法は，「わたし的には」のように，文副詞として機能し，命題内容を見る観点を示す働きをする。形容詞的用法を持たない用法も生じている。

3）新用法は，旧用法のうち「形態的特徴」のように，「X 的 Y」の X が，背景にある実体（ベース）の部分（プロファイル）となっている表現から派生したものと考えられる。X は，実体を見る観点を提供しているからである。X は，実体そのものではなく，実体の部分を示すものであったところに，派生を促す要因となったことが推測される。

4）新用法「～的には」は，観点表示をするものである。これは，一種の注釈表現であるが，この注釈は，以下に述べることが限られた観点からのものであることを注記するものであり，そのことによって，主張を限定的なものとし，かつまた主張を和らげる効果を求めるものである。

5）新用法は，対人的なストラテジーとして，直接性を下げることによって，

相手のフェイスへの踏み込みを少なくし，対人的な距離をおくという効果（ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー）を持つ場合がある。

「的」の新用法について先行研究では，その広がりのプロセスが十分には捉えられていなかったように思われるが，形式の面では，「的」の従来の用法の中に含まれていた“話者の視点表示”が，構造的に特化したものと捉えることができると思われる。それは対人的なストラテジーとして機能するものでもあるが，話し手（主体）を表現する方法ともなっているわけで，単に対人的な配慮だけが動因になっているものではない。

5　接辞「ぽい」について

5.1 「ぽい」の意味・用法の広がり

「ぽい」の意味・用法の広がりを図式的に示すと次のようになる。

16. 「ぽい」の意味・用法の広がり

〈含有表現〉「Y が X を通常値より多く含む」　「*水っぽい酒*」
↓　＊①：X の領域の変化（モノから属性へ）
↓　〈類似表現〉
↓　「Y が属性 X を通常値より多く含む」　「*黒っぽい服*」
↓　↓
↓　「Y が X の持つ属性を通常値より多く含む」「*乱歩っぽい筋立て*」
↓　＊②：形態論上の変化（終止形への接続が可能に。Y の消滅）
↓　X の領域の変化（属性からコトへ）
〈概言的表現〉
↓　「X（というコト）が成立しているように見える」
↓　↓　「*枯れてきてるっぽい*」
↓　「X（というコト）が成立するであろうように見える」
↓　「*雪が降るっぽい*」
↓　＊③：モダリティの変化（命題の確からしさの表現から，伝達の姿勢の表現へ）
↓
〈伝達の和らげ，表現の間接化とあいまい化〉
↓　「X（という話し手の判断伝達）の間接化」「*静かでいいっぽい*」
↓　↓
↓　「X（という事実表現）のあいまい化」
↓　「*作文書かされるみたいっぽい*」
↓　＊④：X の領域の変化（コトからことばへ）
〈メタ言語表現〉
「X という表現が成立するように見える」　「*素敵っぽいもの*」

5.2 「ぽい」の用法の広がりの契機と広がりの方向

上の 16 の中の①～④は，広がりの契機であり，動機付けである。それがどのようなものかを述べる。

①旧用法内の変化は，形態論的性質は変化せず，意味的な拡張のみが起こっている。その契機は，X と Y の関係が変わったことである。X と Y が具体物の含有関係から，属性の含有へと変わったことである。その時点で，含有物表示から類似性の表示へと広がる可能性が生じた。

②旧用法から新用法への変化は，形態論上の変化を伴う。「ぽい」に前接する成分は名詞性を持つものだったものが，活用語の終止形との接続も可能になった。このような変化によって，「ぽい」の表現領域は大きく広がった。このような機能の広がりは，「ぽい」に前接する部分を，モノとして，名詞的に扱えるものとみなすことによって起こったことである。このような形態論上の変化の結果，概言的な表現が成立することは自然なことと思われる。

③これは，モダリティの性質が，命題に対するものから，対人的な伝達姿勢へと変化することによって起きた変化である。変化の方向としては，対命題的なものから対人的なものへと，命題寄りのものからコミュニケーションの場へと次第に推移していく過程に対応している。機能としては，対人的配慮を背景に，直接的表現を回避しようという姿勢を示すものとなっている。

④最後のものは，「かぜを引いたみたいっぽい」のように，概言表現のあとにさらに「っぽい」が接続するものである。形式的には，概言に概言を重ねるような用法であるが，実際的な機能としては，表現の適切性を評価する機能を持つものとなっている。この段階では，対命題性，対人性を失い，対表現的な機能を帯びたものになっている。「Y は X っぽい」という場合の X について，それがこの場合にあてはまる表現かもしれない，ということを表す。

このように見てくると，「ぽい」は，対命題，対人，対表現と，その表現の対象範囲の広がりという点では，かかわりうる可能な範囲全体に及んでいることになる。

6　多機能化について——多機能化の方向と条件について

6.1　機能語が意味・用法の広がりを起こす条件について

まず，この稿で取り上げた 4 つの機能語の他機能への広がり，意味などの広がりについてまとめて示すと次のようになる。a は本来の語の性質，b と c は変化する統語的機能的性質である。

17.「本」「も」「的」「ぽい」の本来の機能と変化の関係

	本	も	的	ぽい
a 用言性の機能語か	―	―	○	○
b 他機能へ広がるか	―	△	○	○
c 前接要素の範疇が変わるか	―	△	―	○

b は「他機能に広がるか」つまり多機能化を起こすかどうかということであるが，多機能化が見られるものは，「的」「ぽい」の 2 つである。また，「も」

の△は，かつて多機能化があり，現在でもその名残があるということを示す。
この分布を見ると，多機能化が起こる要因には，統語的な面と，形態論的な面の2つがある。統語的な面とは表のbに当たり，その語が果たす文内での役割の変化である。また，形態論的な面とはcで，その語と接続する語との接続についての制約の変化である。
これらがどのような幅で広がったか見ると次のようになる。

18. 意味・用法の広がりの幅
  a. 非用言性機能語の場合
    も：類似物の探求範囲を，文脈や上位フレームという自己の外部のものから，自己フレーム内（「XもY」のXの範列をXの内部に求める用法）へ。
    本：具体的なモノを数える助数詞から，ヒトの社会活動に含まれる顕著なものを数える助数詞へ。
  b. 用言性機能語の場合
    的　：形容動詞から文副詞へ。形容動詞としての形式を持たない副詞へ。
    ぽい：形容詞化接辞から，伝達表現そのものに対するモダリティ表示をする終助詞へ。

命題からもっとも遠くへの変化を見せているのは，「ぽい」である。このように，「ぽい」が，命題から遠い位置への広がりを獲得したのは，前接要素についての制約がより緩いものだった，つまり用言的要素に接続できたことと，それ自身が「X ぽい Y」という装定形式から「～は X ぽい」と述語形式化したこと，この2つの変化があったからではないかと思われる。
これらを観察すると，機能を広げるには，次のような方式があるように思われる。

19. 機能を広げる方式
  a. その語の形態論的，統語論的な可能性を利用する
  b. その語の意味的な可能性を利用する

この2つのいずれかあるいは両方を利用することが，広がりを可能にする。この2つはどのような要素にもあるわけであるが，それなしには広がりは起こらない。また，この2つの性格によって広がりの方向の可能性が予想されることになる。
ここに取り上げた4つの語分析によって，機能語の意味用法の拡張全体が捉えられたとは言えないのはもちろんであるが，拡張の方式の一部を垣間見ることはできたのではないかと思われる。

6.2 広がりの動機付けについて

次に拡張の動機づけについて述べる。

1）認知的な動機付け
認知的な面での動機付けについては，「ぽい」を例にすれば，次のような動

機付けが用法の広がりに関わっている。16の図を簡略化して示す。

20.「ぽい」の広がり

（動機付け）	*(例)*	（表現内容）
	「水っぽい酒」	［通常より多い含有量であること］
a　メタファー	↓	↓
↓	*「雪が降るっぽい」*	［確からしさ］
b　メタファー	↓	↓
↓	*「静かでいいっぽい」*	［非断定］
c　希薄化	↓	↓
	「素敵っぽいもの」	［表現の評価］

ここに見られるメタファーによる拡張方式は，類似性の認識に依存するものであり，その依存性，緩さのゆえに，全体的な意味の希薄化を招来するという側面も持っている。「ぽい」の場合はそのひとつの典型であろう。

このように，4つの語について，広がりの方向，広がりの誘発条件という観点から観察すると，「本」「も」のグループと，「ぽい」「的」のグループには，大きな違いが認められる。前者は，主体化されたものごとの捉え方が見られ，後者は，主体自身を表現するという主体の露出状態へと移行していることが観察される。

この2つの変化のあり方は，主体というものが関わるという点で共通しているが，1つは対象を主体に引きつけて捉えることであり，もう1つは主体そのものの表現であるという点で大きな違いがある。どちらを担うかは，語の性格によるところが大きい。

2）社会的な動機付け

このような認知的動機づけに加えて，社会的な動機づけといったものもあると思われる。対人的配慮から生ずるものである。「的」「ぽい」の用法の広がりの動機付けとして，ネガティヴ・ポライトネス（N-P）ストラテジーのうち，「聞き手への負担を最小にする」（Brown & Levinson（1987）の挙げるN-Pストラテジー4），「あいまい化する」（同2）というストラテジーがそれぞれに適用されているのではないかと考えられる。「的」であれば，単に「この案に賛成だ」というように言うだけでなく，「僕的には，この案に賛成だ」というように「僕的には」を加える用法である。このことによって，主張が個人的なものである，あなたは賛成しなくてもかまわないという含意が加えられると考えられるからである。1つの視点を示し，自分の主張は，その視点からのものであって，別の視点をとれば，別の主張がありうるという，別の主張の余地を残すことが聞き手の面子に配慮することになり，聞き手の自己決定権を犯さないということになる。

第2部　フィラーとフィラー化

1　はじめに

1.1　フィラー研究の目的，意義，データ

フィラーは，発話行動に伴って，ほぼ無意識に発せられるものである。また，これらは言語を越えて，どの言語にも見られるものではないかと思われる。フィラーの働きを知ることは，言語を超えて，発話行動がどのように行われるかを知る手がかりになる。と同時に，個々の言語の性格を知ることにもなるのではないかと思われる。

ここで主として使用するデータは，インターネット上で公開されている「インタビュー形式による日本語会話データベース」（北九州市立大学）に採集されているものである。

1.2　先行研究――フィラー研究へのアプローチ

これまでのフィラーへのアプローチは，おおむね次の4つの方向に整理することができると思われる。

1．フィラー研究の4つのアプローチ

a．心理学からのアプローチ

まず，心理学的なアプローチである。田中（1993，1995）に代表されると言ってよいと思われるが，ここではフィラーは停滞現象の1つとして捉えられている。そして，「停滞は，スピーチの生産過程の進行に固有の事情から停滞が生ずるとも考えられる。とすれば，停滞はその心的な過程を覗く『窓』になると期待されることになり，停滞研究が心理言語学の課題の一つになった」と述べられている。ここでは，フィラー研究の目的は，スピーチの生産過程を知るための手がかりということになる。

b．談話論，談話管理論からのアプローチ

2つ目は，談話論からのアプローチである。田窪・金水（1997）などに見られるように，対話処理に関わる心的操作のあり様，それにかかわるフィラーの役割の解明，文という言語形式の形成過程の解明を目指すものである。認知的，心理的な面も含まれるが，田中らの純粋に心理的なアプローチより言語寄りのスタンスをとるものである。

c．社会言語学的なアプローチ

3つ目は，社会言語学的なアプローチである。塩沢（1979），Nagura（1997）などに見られるように，年齢，性別などの社会的な要因が，どのように談話標識，フィラー使用に影響しているか，ということをテーマとしたものである。フィラーというものが，社会的な発達，あるいは社会的な場面とのかかわりが深いという性質に着目し，言語と社会的な要因との関係の解明の手がかりにしようとするものである。電話会話や講演など，談話形態とフィラーの関係を追究した山根（2002）の立場もこれに近いと言えるだろう。

d．会話分析からのアプローチ

最後は，西阪（1999）に代表されるが，社会的相互行為の指標として，フ

ィラーを見ようとするものである。フィラーが，相互行為の形成に際して，どのような働きをしているかという点にある。

これら4つのアプローチは，それぞれに固有の視点を持っており，どれが必要でどれが不要だというような性質のものではない。が，本研究は，これらのいずれとも異なる視点を加える。それは，フィラーというものの機能，発話行動における必要性を，語の機能変化の中から読み取れるのではないかということである。

1.3 フィラーの操作的規定

ここでは，山根（2002）などの先行研究を参考に，フィラーを，仮に次のように規定して検討を始めることにする。

2. フィラーの認定基準
   a. 実時間的に発話やその他の行動に伴って現れる音声
   b. それ自身は命題的な内容を持たないし命題とのかかわりも持たない
   c. 文のモダリティ要素でもないしモダリティ要素との関わりを持たない
   d. 談話標識（談話の組織を形成する要素）でもない
   e. 単独では文としての価値を持たない

1.4 フィラーの出現頻度と本稿で扱うフィラー

フィラーの出現頻度を調べたものに，野村（1996），Nagura（1997），山根（2002）がある。これらの先行研究に加えて，本稿でも「インタビュー形式による日本語会話データベース」の会話に現れるフィラーを数えた。これら4つの統計の中で，3種以上に出現しているものを挙げると次のようになる。これら使用頻度の高いもの9つを，ここでは検討対象とする。

3. あのー，まー，えーと，そのー，えー，こう，なんか，もー，このー

これらを，いくつかの観点によって整理したものが，次の4である。入力系のものも含めて掲げる。

4. フィラーの区分

入力系	・・・・・・・・・・・・		あ，え
出力系	専用系	・・・・・・・・	えー，えーと
	派生系	指示詞由来・・	あのー，そのー，このー，こう[4]
		副詞由来・・・	まあ，なんか，もう

[4] 指示詞由来のフィラーは「あのー」「そのー」「このー」と長音符号「ー」をつけて示すが，これはフィラーであることを示すためのもので，それが長音であることを意味しない。ただし，「こう」「まあ」「もう」は，元の語形を残すために「こう」「まあ」「もう」とした。

以下，ここに挙げたものについて，指示詞由来のもの→副詞由来のもの→専用系→入力系の順に検討を加える。

2 「この一」「その一」「あの一」について

2.1 「この一」「その一」「あの一」のフィラーとしての性質

はじめに，指示詞由来のフィラーについて検討するが，まず，その性質をまとめると次のようになる。用例は紙幅の関係もあるので，1例ずつ挙げる。

5.「この一」「その一」「あの一」の性質

a.「この一」

発話時に，ある表現内容が心的に思い浮かべられているが，その内容を表す形式が確定していないとき，その内容を指す。

2：はい。それ（1：うん）いろんな，あの，いろんな方があの知恵を授けてくださいましてね，あの一，うん，ボンの<u>この</u>，棒ですか？あれのう，裏にかっく，置くようにすると，烏は狙わないとかって教えてくださいましたので，今のところそ，そういう風にしておりますが（1：あ，そうですか），はい。（MFf）[5]

b.「その一」

後続する発話内容が，話し手にとって非関与的（話し手に関わりがない，あるいは，聞き手・話し手双方に関わりのない）領域のものであること，あるいは，話し手の独占的な関与を主張のできないものであることを示す。

1：あ（2：はい）そうですかー。あの一，失礼ですけどご主人様は，どのような<u>その</u>，例えば，ある，典型的な一日ですと，（2：ええ）何時頃お宅をお出になって何時頃お帰りになられるんでしょ？（ITf）

c.「あの一」

話し手が自分の発想から発話を展開することの前触れをする。これは，それまでの談話の流れに関わりなく持ち出されることもあるので，場合によっては，それまでの談話の流れを中断することもある。

1：（研究について）どういうふうに，あの，考えてらっしゃるんですか？それ。

2：<u>あの一</u>，<u>あの</u>，黒人一の一，黒人女性一の，<u>あの</u>，詩人で，マヤ・アンジェロさんっていう方，<u>あの</u>，クリントンの，<u>あの</u>，大統領の就任式で詩を読んだ方なんですけれども（1：ええ，ええ，ええ）彼女にとても興味を持っていて，（略）（WAf）

2.2 「この一」「その一」「あの一」の談話内の機能と相互関係

---

[5] 文中の用例に付した「MFf」などの記号は，「インタビュー形式による日本語会話データベース」の対話に付けられたものである。

このような性質を基盤として，3つのフィラーがそれぞれ談話の中でどのような機能を果たすかを整理すると次のようになる。

6. 「この一」「その一」「あの一」の談話内の機能
　この一：ひとまとまりの内容の開始部の表示
　その一：談話参加者と談話内容の領域との関係表示
　あの一：コミュニケーションの開始，談話の展開，談話形成に関する対人的調整

この関係を図式化すると次のようになる。「この一」などを【コ】と表す。

7. フィラーの相互関係

［対立軸 1］：【コ】－【ア】
　　|
［対立軸 2］：【ソ】－【ア】

対立軸 1 は，談話の形式面に関するマークとして機能するもの，対立軸 2 は，談話の参加者と談話内容領域との関係に関するマークとして機能するものである。コソアは，大きく2つの機能を持つということで，1つは，談話そのものの開始，話題の開始などをマークし，談話の形式の形成にかかわる面，もう1つは，発話内容がどこから来たものか，話し手に由来するか，聞き手にゆらいするのか，といったことを先触れ的に表示する。もちろん表示は意図的に行われるものではないが，話し手の内部では発話内容を形成するに際して，参加者と内容との関わりについて，モニターが働いていることを暗示するものではないかと思われる。

2.3 フィラーのコソアと指示詞コソア

フィラーとしてのコソアと，指示詞[6]としてのコソアの関係は，どこかで連続するものと思われるが，この稿では，2者の関係について，次のように考えた。

8. フィラーとしてのコソアと，指示詞としてのコソアの関係
　a. 指示（照応）という観点から言うと，フィラー化することによって，後方への指示（照応）のみを行うようになった。例えば，「その」は，「昨日，田中という人が来た。その人は，父の知り合いだと言っていた」のように，前方照応をするのだが，フィラーでは「その一，おたくの会社，景気はどうですか」のように，後方向きに機能する。フィラー化によって，命題内から外に出て，発話行為との関わりを持つものとなった。
　b. 現場指示詞のソには，2種のソがある（聞き手関与のソ，非関与のソ（中距離のソ））が，この2つの性質を持つと思われる談話に出現し，継承が観察される。

---

[6] 指示詞の研究史などについては，金水・田窪（1992），加藤（2004）など参照。

c. ア系フィラーは，長期記憶指示のアを継承している。探索対象のある探索指示から，探索行為だけが付随するものへと「ア」の機能は変化しているが，指示詞の性格の一部を継承している。

フィラー化することによって，コソアは，探索対象の点的な指示から，発話内容領域の漠然表示へと性格を変えたことになる。

2.4 コソア・フィラーと対人機能

コソアのフィラー用法は，対人的な場面でのみ現れる。非対人場面では現れない。対話では，聞き手の様子を見ながら内容が形成され，表現されていく。対人的な配慮が行われるわけであるが，コソア・フィラーは，後続内容が参加者とどのような関係にあるかを表示することによって，そのような対人的配慮を表現する機能を果たしているものと思われる。

3 「こう」について

3.1 「こう」の性質

コソアの副詞形としては，「こう」のみがフィラー化している。「ああ」「そう」はフィラー化していない。「ああ」「そう」が応答詞，あいづちとしての用法をもつからかもしれないが，理由はよくわからない。それはともかく，「こう」の用例としては，次のようなものが挙げられる。

2：あとはあのー，（1：うん）あの主人がイラン人なんですけれども，（1：はい）あの向こうのこうー，くねくねとした踊りっていうんでしょうかベリーダンスー，とは（1：ベリーダンス）またちょっと違うんですが，（1：うん）ああいうダンスもこう見てて面白いなあ思うので，（1：うん）まあやってみたいなと思いながら，こう基本的なこのへんを動かすようなことは，始めましたけれど，まだこう，踊れる，というほど，（1：うーん）行きません。（IOf）

この例に見られる「こう」は，「こう」が何を指しているか，聞き手には明示されていない。話し手がその心内に対象は保持しているであろうが，その名称，表現の仕方が定まらない対象の存在とかかわっているのだろうと推測される。このような用例の観察をもとに，「こう」の性質を9のように考えた。「この」との違いは，9と10に下線で示したように，探索対象の違いである。

9.「こう」の性質，機能について

心的に思い浮かべられたイメージ（表現対象）について，そのイメージを心的に走査しながら，それを表現する形式の模索が行われていることを示す。そのイメージは，ひとつのことがら，あるいはそれを構成する要素など，ひとつのイメージとして把握できる程度の大きさであると考えられる。結果として，表現は得られないこともあるし，また，得られたとしても必ずしも確定的なものではないという含意が生ずる。

10.「この一」の性質

発話時に心的に思い浮かべられている内容があるが，その表現形式が確定しておらず，実時間的に，対象にもっともふさわしいカテゴリ名を探索していることを示す。

これは同時に，聞き手には表現形式の模索中であるというマークにもなる。

また，「この」と「こう」では，先行研究での調査でも「こう」のほうが使用頻度が高い。これは，「こう」の行う表現全体の模索ということが，「この」が行うカテゴリ名の探索より頻繁に行われるということを示すものであろう。

3.2 「こう」の派生過程

変化の過程は下図のようなものが想定される。フィラー用法の派生の動機付けは，表現探索のための心的な余裕への要求であり，それを支えたのが，副詞の性格から来る統語的な自由度の高さである。そして，その模索の方向付けとして機能したのが，指示詞としてのダイクシス性であると考えられる。しかし，「こう」についても，フィラー化の結果，前方照応性は失われている。後続する発話への心的な傾きがフィラーを求めていることを窺わせる現象である。

11. フィラーとしての「こう」の派生過程

〈「こう」の副詞用法〉

現場での動作指示用法　*「ドアの取っ手をこう回してください」*

文脈での後方照応用法　*「私は，こう思います。彼は優秀だと」*

↓

【統語的な位置づけの変化，指示先の変化（外界から話し手内へ）】

【表現の探索のための心的な余裕の要求】

↓

〈「こう」のフィラーとしての用法〉

【心内イメージの走査】「私は，こう，彼は優秀だと思います」

4 「まあ」について

4.1 「まあ」の用法

フィラーとしての「まあ」も，言うまでもなく副詞から派生したと考えられるが，まず副詞としての用法がどのようなものか見てみる。フィラーに何が継承されているかを見るためである。「まあ」の副詞用法は次のようなものである。

12.「まあ」の副詞用法の例

a. このデザイン，まあ好きです。

b. まあ何とかやっています。

c. まあいいか。

d. この分じゃ，まあ誰も来ないね。

e. 文句を言わず，まあ食べてごらん。
f. それじゃ，まあ説明しよう。

これらの用法に見られる共通の意味は次のようなものである。

13. 副詞としての「まあ」の意味
a. そこに叙述された内容は，当該事態について存在するいくつかの可能な判断や評価の中からの選択されたものであることを示す。
b. その選択は，必ずしも最善ではない，あるいは，厳密なものではなく暫定的なものに過ぎないということを示す。

4.2 フィラーとしての用法

これに対して，フィラーとしての用法はどのようなものか。用例を観察すると，フィラー用法においても，暫定性表示という機能は保たれていることが認められた。そして，その表示は，これから行おうとしている自身の発話行為に対して付けられるようである。そこで，「まあ」がどのような発話行為に付けられるかという観点から区分を行った。用法区分ごとに，例を付して示す。

14. フィラーとしての「まあ」の用法区分
a. 注釈の「まあ」
「まあ」に，注釈的内容が続くもの。発話内容をモニターした結果として，発話内容が量的あるいは質的に十分なものではない，暫定的なものに過ぎないという認識の現われと考えられるもの。

2：日本一で，仕事をしていたときも大体帰るのが，そうすね9時とか10時一でしたので，（1：うん）でー，まあ友人の中には，11時とかいました，しー，あのー，ちょっとー，あのー，なんていうんですかねえ，（1：ええ）非人間的というか，（…）（TSm）

b. 例示の「まあ」
例示が行われるところに現れる。話し手の知識（長期記憶）の中の，あるカテゴリーから，求められるメンバーを取り出すという心的な活動に連動すると考えられるもの。この例のように，例ごとに現れる場合もある。

（アメリカにいたころの暇な時間の過ごし方を聞かれて）
2：あ，えっと，アメリカではあのー，まあ，友達とあったりとか，（1：ふうん）まあ本を読んだりとか，まあ，映画を見たりとか，まあ色々な形であとー，（1：うん）なんていうかエクササイズみたいな感じで，（1：ああ）まあわたしは散歩とか水泳が好きなんですけれど，（1：うん）そういったものも，毎日，出来るっていうような，環境ですねえ，ええ。（TSm）

c. 見解表示の「まあ」
自らの見解を述べるところに現れる。暫定的なものとして提示することで，主張を和らげようとするものと考えられる。同時に，コメント形成のための

心的資源確保の手段という面もあると思われる。また，この用法は，慣用度が高く，談話標識としての機能も獲得しているとも思われる。

・まあ，一瞬の隙を，白が，あれですね，とらえましたね。
・まあ，今黒番ですから，盤面で，ちょっと怪しいぐらいの感じかな。
（例は，NHK 囲碁選手権戦 2007 年 5 月 13 日における解説者の発言）

d. 発話ポイント表示の「まあ」
これは，見解表示の「まあ」の一種とも考えられるものであるが，談話内の機能としては，話のポイントに先行し，予告する機能を持つようになっている。

・小西：いやまあ，いちおう，どういうラーメンなんですか，赤とんぼ。
大崎：えーとですね，ま，魚介系がガツンときいた，え，和風ダシなんですよ。（TBS ラジオ「コラムの花道」2006 年 9 月 22 日放送）

e. 引用の「まあ」
相手の発話を引用するときに現れるものである。これは，相手の発話をとりあえず認めるという暫定性に基づくものと考えられるが，これは「まあ」が談話の内容的区切りのマーカーとしての働くという次のfの用法につながる。

1：あーそうですか。（2：はい）で，パン屋さんを選んだ理由っていうのは，なんか，やっぱり，パンが好きとか，あの匂いがいいとかそんなんですか？
2：あー，まあ，パンが好きって（1：はは）いうのもありますけれどもー，まあ，たまたまー，私寮にいたんですけれども（1：ええ）寮で，その先輩がしてたんですね。（1：うーん）で，（1：なるほどね）後釜というか（…）（CIf）

f. 談話の区切りを示す「まあ」
談話において，そこまでの内容が概括され区切られるということと連動していると考えられるものである。「まあ」は，その概括が暫定的なものと表示することによって，内容の妥当性についての主張をを和らげるという，対人的な配慮もすることになる。

・（…）追憶の中に永遠に横浜駅桜木町」と，こういう詩がですね，ある一角に，こう，飾ってあったんですよ。え，これはぼくは，非常に面白いと思いましてメモったんですが，今はどういうわけかなくなっちゃいましたね。これ，どなたが作ったか僕は知りませんけれども，ま，ここにですね，桜木町という駅がどういう歴史を踏まえながら，えー，今日まで来たかと，ま，いうことが，えー，ある程度つかめるんじゃないか（と）。（NHK ラジオ「NHK カルチャーアワー」井上謙「横浜湘南を歩く」2006 年 10 月 29 日放送）

4.3 「まあ」の用法間の関係

副詞「まあ」は，述部と形式的な呼応はないが，モダリティ性を持つものである[7]。暫定性表示が「まあ」のモダリティ表示であるが，述部との呼応が緩いために，文内での位置づけが不明確な状態が許容されることにもなり，それがフィラー化，談話標識化の素地となったのではないかと思われる。

ここまで述べた用法間の関係を，意味用法広がりの契機とともに，図式化すると次のようになる。

15.「まあ」の意味用法の広がり　〈　〉内は広がりの契機

副詞用法の「まあ」
　↓　Ⅰ〈統語的な位置づけの不明確化／フィラー化〉
注釈の「まあ」　→　例示・見解・発話ポイント表示の「まあ」
　↓
引用の「まあ」
　↓　Ⅱ〈慣用化〉
談話区切り表示の「まあ」（談話標識化）

この広がりの中で，「暫定性」の表示という性質は，どの用法にも一貫している。

それに対して変化したものは，発話内での位置づけである。発話内に収まっていたものが，構文的な位置づけを持たない単位へと変わったことである。慣用度が高くなるに従って，談話標識としての性質も帯びるようになる。談話標識的な機能を持つということは，程度差はあるが，「あのー」など，他のフィラーにも見られる性質である。

5 「なんか」について

5.1 「なんか」の用法の広がり——名詞用法からフィラーまで

「なんか」は，「まあ」と異なり，まず名詞用法から副詞用法へと広がったものと考えられる。そのような広がりの後にフィラー化へと向かったのではないかと思われる。その過程として下図のようなものが考えられる。

この方向を全体的に見ると，次のような方向が内在している。

16.「なんか」の推移（Ⅰ～Ⅲは，下の 17 の中のⅠ～Ⅲ）
　Ⅰ．コトガラの表現から，話し手の姿勢の表現へ
　Ⅱ．発話から談話へ
　Ⅲ．発話内容予告から談話方向操作へ，対人配慮性の表示へ

この推移の出発点は，命題内にあった「なんか」がそこから離脱し，事実とのかかわりが希薄化することである。そして，そこから 2 つの方向へ向かう。1 つは，次第に談話処理との連動性の高い表現へといわば内化していくという

[7] モダリティ副詞の詳細については工藤（2000），仁田（1991）など参照。

方向（談話形成への方向）。もう 1 つは，対人的な配慮などを示す手段としての機能を帯びるという方向（対人的配慮の方向）である。

17. フィラー化の過程

Ⅰ〈名詞用法〉
　モノ：特定できない対象の表現　「*なにかが目の前を通った*」
↓　〈モダリティ要素化〉　*同格構造から修飾構造への移行*
〈副詞用法〉
　感覚：由来を特定できない感覚の表現「*なんかおかしい*」
　認識：由来を特定できない認識の表現「*なんか忙しくなってきた*」
↓　〈フィラー化〉
↓　【*統語構造の曖昧化，特定のモダリティ形式との呼応の不明確化*】
〈フィラー用法〉
Ⅱ　発話内容の方向予告：由来の不透明な主張を述べることのゆるい予告
　↓　「*なんか，なんか，金はあまり要らないって思ってるんです*」
　談話の方向修正：現在の話題と関連の不透明な話題の導入
　↓　「*なんかよく聞くのはね，……*」

Ⅲ　対人的配慮表示：導入情報と話し手のかかわりの曖昧化・間接化
　↓　「*なんか～っていいますからね*」
　談話への割り込み：現在の話題との関連のない話題の導入
　「*なんか，誰か来たようですよ*」

5.2　フィラー化の環境，動機付け

フィラー化するためには，意味的な要因とともに，構造的な要因が重要であると考えられる。それは，構造的な解釈が厳密でないということである。近接している場合には，複数の品詞としての解釈が可能であり，また，離れている場合は，その離れているということのために，どの要素とかかわりがあるのかが不透明になるという現象が考えられる。これは，フィラー化を可能にするための一つの要因であろうと思われる。

また，フィラー化の動機として，対人的な配慮，談話維持のための心的余裕の確保というようなものが推測される。

フィラー化についての，これらの性質は，前節の「まあ」にも見られたものであり，「なんか」に限ったものではない。

6 「もう」について

6.1 「もう」の用法の広がり

「もう」は副詞あるいは感動詞としての用法を持つ。「もう」の基本的な意味とその広がりを，渡辺（2001）などを参考に，以下の 5 つに整理した。「もう」の基本用法には，当該事態について，1）その事態の実現時点，2）事態を把握した時点，3）事態が実現すると想定した時点，の 3 つの時点が絡んでいる。以下の図で，●は「当該事態の実現した時点」，☆は「事態を把握した時点」，

○は「実現の想定される／た時点」，×は「実現，実現の想定などのないこと」を表す。

18.「もう」の基本的な意味

① （基本用法）ある事柄が，事態把握時点から見て，実現想定時点より早く実現したことを表す用法

・今日の仕事は，もうすんだ。

実現時点　事態把握時点　実現想定時点

（過去）――●――→――☆――→――○――→――→（未来）

② 事態実現時点と事態把握時点が焦点化され，発話時に当該事態がすでに実現している（ある基準に達している）という点が焦点化された用法

・おなかがいっぱいだ。もう食べられない。

実現時点　事態把握時点

（過去）――●――→――☆・・・・・（×）・・→（未来）

③ 事態把握時点と実現想定時点が焦点化され，事態把握時点で，想定が実現していないことを示す用法。

・彼は，もう来るだろう。

事態把握時点　実現想定時点

（過去）・・・（×）・・・―☆――→――○――→――→（未来）

④ ③の用法は時間についてのものであったが，それが量に転換された用法。想定された量が，事態把握時点で実現していないことを表す用法。

・もう5万円必要だ。

事態把握時点　明示された量／存在

・・・（×）・・・・・☆――→――○――→――→（変化方向）

⑤ 発話時点で，なんらかの「基準」を超えていることを表す用法

・もう最高です。

基準量　発話時点

・・・・・（●）――――☆・・・（×）・・→（変化量）

「もう」の副詞としての用法の広がりは，事態を捉える時点の減少に対応している。

これに対して，フィラーとしての用法は，次の3つに分けて捉えた。

⑥ 話題の事柄の成立を当然のことと見る姿勢と連動する用法

1：（…）あのー，学校に行っていた（2：はい）時代ね，（2：はい）そういういじめとかってありました？

2：あー，/それはーもう。（1：やっぱり？）それはもう，ありました。（CIf）

⑦話題の事柄が特筆すべき経験であるとする姿勢と連動する用法

1：どうですか？（2：ええーあのー）受験生のお母さんとしては。

2：6月30日までもうクラブ一筋でまいりましたので（1：はいはい）で水泳クラブに（1：ああーああ）所属しております，したけれども6月30日の大会で一応引退いたしまして（1：ハハハ）であの/切り替えて（1：ええ）お勉強というあのー（1：ええ）感じで。まだーあのー本腰ではご

ざいません。(MTf)

⑧心情表現としての「もう」——⑥，⑦の中間の「もう」

・(話者 1 が，ロールプレイの段取りを説明する場面)

1：(…) ちょっとこれ，こちら先にお読み下さい。/////出来るだけいい条件で働けるようにということ，ですね。(2：はい) じゃあたくしが<u>もう</u>，あの面接一官 (2：うふ) ていうんですか？面接している人に，(2：はい) なりますので，お願いします。(RTm)

このフィラーとしての用法が成立する背景として，1 つには次のような認識の推移が想定される。個別的な事柄の成立に関する認識を，成立して当然のことと捉えなおすということである。

19. 用法①から⑥への広がり——「当然」性の付加

"すでに成立している事柄である" (用法①)

↓

"すでに広く認められている見方である"

↓

"当然のことである" (用法⑥)

もう一つは，すでに成立しているという時間的な把握を，量的な把握へ転換し，なんらかの「基準」を超えているという認識へとずらす方式である。

20. 用法②から⑦への広がり——「特筆」性の付加

"基準量を超えている" (用法②)

↓

"目立つ事柄である"

↓

"特筆すべき経験である" (用法⑦)

以上の派生関係を図示すると次のようになる。

21.「もう」の用法の広がり

〈副詞用法〉 〈フィラー用法〉

①「今日の仕事はもうすんだ」⇒ ⑥「もう大学生と言ったら家庭教師」

↓ ↓ (＋当然性) |

↓ ②「もう歩けない」 ⑧「私がもう面接官になります」

↓ ↓ |

↓ ⑤「もう，最高だね」⇒ ⑦「もうクラブ一筋でまいりました」

↓ (＋特筆性)

③「もうそろそろ帰ろう」

↓

④「もう 500 万円あれば」

6.2 フィラーとしての「もう」の特徴

「えー」など情報処理のために心的なスペースを作ろうとするフィラーとは異なり，「もう」にとってはそのような心的スペース形成は，二次的なものである。「もう」がしていることは，その話題内容についての話し手の姿勢（何らかの基準に基づく評価など）を示すことであろうと思われる。それが高まれば，心情的な昂ぶりを表現することにもなる。

「もう」がフィラー化する背景には，このような，内容についての姿勢の表現というようなことがあるのではないかと思われる。“それは当然のことである”，あるいは，“それは特筆に値することだ”というような話し手の心的な昂揚が，文という容れ物からあふれ出て表出されたものが「もう」なのではないかと思われる。

同じく副詞由来のものでも，「まあ」や「なんか」には，このようなポジティヴな，自身を積極的に前に押し出すような性質は見られない。それは「もう」の大きな特徴だろうと思われる。ただし，文として取り込まれる以前の心的なありようが表出されるという点では共通している。

以上，派生形のフィラーについて述べた。

7 「えーと」について

7.1 「えーと」の性質と機能

ここからは，この稿で言う“専用系”のフィラーについて述べる。

まず，「えーと」について述べる。用例の観察から，基本的な性質を次のように考えた。

22.「えーと」の基本的な性質

「えーと」は，心内に発話に必要な情報，あるいは，表現形式が形成されていないことに気づき，その空白を埋めるために，情報形成あるいは表現形式形成のための心的活動に入ろうとする状態にあることを示すものである。

ここでのポイントは，単に心的なスペースを確保するということだけではなく，心内に必要な情報が存在していない状態の認識と結びついているということである。このような性質から，次のような機能を持つ。

23.「えーと」の機能

a. 談話プランとのかかわりを表示すること

「えーと」の使用の前提には，談話参加者間で暗黙のうちに形成されている談話プランがあると想定される。「えーと」は，そのプランに沿って，発話者が発話していることを示す。したがって，談話の開始部には現われない。また，「あのー」には，このような，談話プランとの関わりを示す機能はない。

b. それまでの心内の作業内容をクリアすること

「えーと」は，話題の転換点に生じる心内の空白に対する認知と連動している。談話の転換点では，それまでの談話の流れを止め，新たな話題を導入するわけであるが，その切り替えに伴って，心内に生じた空白の認知を

「えーと」がマークするとともに，また，その切り替えのために「えーと」によってそれまでの談話の流れを止め，意識的に空白を形成することもある。

具体的には，次のような場合に現れる。以下の例は，基本的には同じ性質の現われであって，用法の区分ではない。用法を考えるための事例である。
まず，応答を中心に例を挙げる。なお，これは網羅的なものではないが，代表的なものではある。

24.「えーと」はどのようなときに現れるか
① 応答に現れる「えーと」
応答のために問いの保持と，応答の形成を行うが，まだ，必要な情報へのアクセスができていない，アクセスを行おうとしている状態に対応するものだと思われる。

1：去年はどこはいらしたんですか。
2：<u>ええと</u>，去年は軽井沢から日本海の方に出まして，（1：ええ。）で，福井とかを回って京都までいって，それから東京に戻ってきました。(TAf)

② 誤解に基づく質問などに対する対応する際の「えーと」
次の例のように，相手が誤解していることに気がついたが，それへの対応に戸惑いがあり，応答の組み立てができていない状態にあるときに現れるものである。

1：で，今は，学生さんたちは，夏休み，でしょうか。
2：<u>ええと</u>そうですね，学生さんと言いますか皆さんあの，もう社会人で，（1：はい）夏休み取りおわった方と，これからの方と，色々，（1：ああー）いらっしゃいますけれど。(ITf)

③知悉していることがらについて聞かれた場合の「えーと」
次の例にみられるように，答えるべき内容に関しては知悉しているはずである。検索にそれほど時間のかかることないとすれば，それをどう表現するかという形式の形成に対応するものとも考えられる。いずれにしても，発話内容の空白状態にあることは共通している。

1：あのー，あの小さなお子さんが（2：はい）いらっしゃるようですが（2：ええ），じゃご家庭で（2：ええ）あの，お子さんは何人いらっしゃいますか。
2：<u>えと</u>2人おりまして（1：あっ，そうですか）ええ（…）。(KJf)

次は，応答以外の位置に現れる「えーと」である。

④　質問の冒頭に現れる「えーと」
ここでは「えーと」の役割として，次の2つを指摘することができる。一つは，当の質問が談話プランと関わりあることを表示すること，もう一つは，そ

れまでの心内の作業内容をクリアすることである。切り替えのために「えーと」によって中断し，意識的に空白を作ることもあるのではないかと思われる。

次の例で，質問の内容が変わるたびに「えーと」が現れるのはそのためである。

1：あ，今尾さん（2：はい。）ですか。はい，じゃ今尾さんと呼ばせていただきます。
2：はい。
1：えっと今尾さんは，あのー，学生さんですか。
2：はいそうです。
1：えっと何を専攻してらっしゃいますか。
2：はい，今の専攻は，あのー，言語学てか，語，語学ですね。英語を専攻しようと思ってますけど。
1：あーそうですか。（2：はい。）えっと，どうして英語を勉，ま専攻なさりたいっ，ていうふうにお思いになったんですか。（YIm）

⑤　話題の切り替えに利用される「えーと」

「えーと」は，談話プランの主導権を持っている側から発せられる。上の④と同様に，談話プランとの関わりのあるところに現れる。また，それまでの話題をクリアするという点も共通している。談話標識としての性格も併せ持つといえよう。④の例と同種のものであるので，例は省略する。

7.2 「あのー」との異同——談話での「えーと」の性質

ここでは次の3つの点について，「あのー」との異同を述べる。

25.「えーと」と「あのー」との異同

a. 談話（あるいはコミュニケーション）の開始に使えるか

「あのー」によってコミュニケーションを開始することはできるが，「えーと」はできない。コミュニケーションの回路を開く働きは「えーと」にはない。これは先ほど述べた，それ以前の話題をクリアするという「えーと」の性質と裏腹の関係にある。

b. 談話の暗黙のプランとのかかわりはあるか

「えーと」は，談話プランへの整合性が高く，その分，「えーと」の後に持ち出される話題についての制約が強い。新話題は，当該の談話に関係のある話題という認識が保持される範囲になければならない。次の例で「あのー」が使われにくいのは，談話のプランに「塩を使う」ことが含まれているからである。

・（料理教室の講師が，料理の手順を説明しているとき，助手に）
｛　えーと／？あのー　｝，その塩，とってもらえませんか。

子どもの発話に「えーと」が多いのは，子どもの情報処理の能力が十分でないということもあると思われるが，それだけでなく，子どもが設定された談話の方向に忠実であろうとするということの証でもある。必ずしも，処理能力が低いための停滞というだけの問題ではない。

c.「えーと」を使うことのできる参加者はだれか

「えーと」は，参加者間で了解された談話のプランにしたがって進行しているときに発話権を持つ参加者によって使われる。「あのー」には，そのような制約はないと思われる。「あのー」は割り込みにも使われる。

7.3 「えーと」とていねいさ

「えーと」は，「あのー」より，丁寧度が低いと言われる（横林 1994 など）が，それは，上に述べた，談話プランの共同的な遂行ということと関係があるが，もうひとつは「えーと」の「と」によって，対人的な働きかけを中断し，話し手自身の方向へ発話の向きを変えることも関わっている。この点については次節「えー」との比較で触れる。

以上，「えーと」について検討を加えたが，先行研究（森山 1989，田窪 1992，定延・田窪 1995）の多くは部分的な用法に関する議論だったが，基本的な意味から出発して，広い範囲の用法を捉え得たのではないかと思われる。

8 「えー」について

8.1 「えー」の機能

次に「えー」について述べる。「えー」の性質については，いくぶんか重なりはあるが，次の 5 つに分けて捉えることができよう。

26.「えー」の性質

①新しい談話の開始，話題の開始（旧話題からの転換）を示す。

「えー」は談話そのものの開始を前触れする。

> えー，今回は，第四回，えー，海への思いと，えー，いうことで，散歩するわけなんですけれども，あのー，テキストのうしろの方に，あのー，地図がございますので，えー，ちょっとその地図を開いていただきたいと思います。（井上謙「横浜湘南を歩く」2006）

②談話の新しい局面への移行を示す。

これは，話題の転換など，新しい局面への転換をマークするものである。

> オザキ：（……）まさにこの歌としてはこのきっかけなんですね。
> 小西　：なるほど。えー，ということでね，まさにそのラーメンライフの一端を，今日はね，えー，おー，あのー，今日はお伺いしたいんですが，あのー，えーと，お昼のこの時間にラーメンは当然の食べになったと思うんですが。
> オザキ：そうですね。（TBS ラジオ「コラムの花道」2006）

③談話の中心プランに沿った発話であることを示す。

次の例には，「えー」のほかに，「まあ」「あのー」が現れているが，夏休みに何をしたいかという質問に対する答えとしての中心線（「兄のいるドイツに行ってみたい」）の部分は「えー」がマークしているのも，中心線に沿った発話の一つの例である。

2：(…) あのー，えー，兄が今，たまたま，あの，研・・・ま，兄も大学の（1：うん），あの，しゅ，教員なんですけれども，あの，研究機関で，えー，ドイツにおりまして（1：はい），あのーそちらに少し（1：あー），まあ，遊びにっていったら語弊がありますけれども，（1：うん）訪ねて，えー，行ってみようかなと思っております。（TOm）

④質問を受けた時など，内容や表現を調整するための心的スペースを作り出す。
この用法の例としては，①の例に見られるものである。発話内容は準備されているのであるが，発話に際しては，その調整は常に必要になる。その際に現れるのが「え」であると考えられる。（例は⑤参照）

⑤反応を遅延させ，時間的な距離（スペース）を作り出す。
ここに挙げた表現は，反応遅延という時間的なスペースの形成によって，フォーマリティを高めるなど，対人的な配慮の表現手段となっている。「えー」は，「えーと」と違って，独り言には現れないフィラーであると思われるが，その本来の機能として，対人的な場面での調整手段という面があるのではないかと思われる。

1：宮本輝さんっていうのはどういう作家ですか？
2：えーだいたい同年代 40ーもう 50 に近いぐらいの男性なんですけれども。
1：はい。（YSf）

8.2 「えー」の出現する条件

上の説明の中に，すでに述べたことであるが，「えー」が出現するのはどのようなときかを，対人場面，発話権，内容の操作性という 3 つの観点から見直してみると次のようなことが挙げられる。

27.「えー」の出現する条件
a. フォーマリティの高い対人場面である。
b. 聞き手がその話し手の発話を待ち受けている。
c. その場面での発話権が話し手一人に与えられている。
d. 内容について準備されている，あるいは，内容形成に自信がある。
e. 内容や表現の選択，形成に自由度がある。

8.3 「えーと」と「えー」

「と」には，発話のモダリティを無化する機能，つまり，発話が外に向かう力を消し去り，対他性を取り去る働きがある。したがって，「と」の前の部分を，引用と同様にいわゆるモダリティを持たないものとして扱うことになる。「えーと」において，対他性が取り去られた結果，自分に話しかけるように，内向きの発話になるのではないかと思われる。「えーと」は，「と」が加えられることによって，「えー」という対他的な性質のフィラーから，その対他性を消去し（あるいは，弱め），話し手の内部で行われている処理に目を向けさせるフィラーへと変容させられていることになる。

「えー」の機能は，フォーマリティの高い場面で，発話権を持つ話者が，談

話のプランに沿って，談話を始めたり，新しい話題に移るところをマークするものであるが，基本的には，心的なスペースを作るところにあり，それがフォーマリティにもつながる。またそのため，「えー」は一種の談話標識としての機能も持っている。

9 「あ」と「え」について

ここまでは，出力系のフィラーについて検討してきた。それと比較するために，入力系のフィラーとされる「あ」「え」を取り上げる。これをフィラーとするのが妥当なのかも含めて述べる。

9.1 「あ」の性質

まず，「あ」の性質をまとめて示すと次のようになる。例を付して挙げる。

これまで「あ」は驚きを表す（森山・張 2002）などと言われてきたが，以下に見るように，それは妥当ではない。新しい情報に向かい，発話も含めた反応が必要なときの一つの対し方として見るべきものであろうと思われる。

28.「あ」の性質

a. 入力情報によって，関連性のある知識が引き出され，その状況についての解釈が成立したことを表示する。

（インタビューを終わる際のやりとり）
1：あの，じゃあいい旅行になるように祈っております。
2：はい。
1：今日は本当にありがとうございました。
2：あ，どうもありがとうございました。（MAf）

b. フォーマリティが高い場面で，ターンが渡されるタイミングに現われ，待機状態から発話開始への心的な状態の転換を表示する。

1：（…）はい。もしもし，根津でございます。ただ今留守にしておりますので，恐れ入りますが，発信音の後，メッセージをお残しください。後ほどこちらからご連絡致します。どうもありがとうございます。ピーッ。
2：あ，もしもし，あ，小川ですけど，あのー，んん，えーっと，なんかあの，ミッションインポッシブルっていうー，面白そうな映画やってるんだけど，えーっと，もし時間あったら一緒に行きたいと思ってるんだけど（…）（TOm）

c.「あ」は，相手からの働きかけに対する反応を高める心的なエネルギーの上昇と連動している。そのため，「あ」は，応答の冒頭などで，相手の話を意識を高めて聞いているという表示となり，敬意表現の手段となる場合もある。[8]

---

[8] 定位反応など，生理学的な観察については，山本・鈴木・田崎（1999）など参照。

1：その旧ユーゴスラビアの映画（2：ええ。）ですか，それどんな映画だったんでしょう。ちょっと，お話ししてみて下さい。
2：あっ，話しますか。
1：はい。(MKf)

d. 自己発話内に現れる「あ」は，その時点で，より関連性の高い情報に思い当たったときに発せられる。その結果，談話の流れが中断されることもある。

1：え，このへんはあの，あの一木曜日が，燃やせないゴミなんですけれども，あのプラスチックなんかは，袋に入れていただいて，あっ，透明の袋なんですね，透明の袋に入れていただいて，あと缶とか，あのスチールもーそうですしアルミもそうですが，あの一資源ゴミでリサイクルいたします。(MAf)

9.2 「あ」と「え」とは何が違うか

一方，「え」の基本的な性質は，話し手にとって，新規情報の定位がうまくいかないということを表示することである。なぜそのときに「え」と発するかといえば，「あ」で述べたのと同じく，そのような異質な情報への反応のための心的なエネルギーを集中させるための方策が必要であるからであり，またその結果としての発声であると思われる。新規情報の定位がうまくいかない場合の典型は，聞き返しであるが，その例は省略する。

これまでの「え」に関する議論でうまく捉えられていないものの1つは，儀礼的な「え」である。これは，相手の礼，ほめことばなど，話し手に向けられた positive politeness が理解できなかったかのように振舞うという，社会的な方略としても機能している。つまり，コミュニケーションの失敗としての「え」という見方（田窪・金水 1997）ではとらえきれないものである。

1：ああーああーああ，ああ，そうですねー。(2：はい）んー，はい。じゃ今日はこれからまたアルバイトの（2：はい）ほうに戻るんですね？（2：はい）お時間さいてくださってどうも（2：え，いえいえ）ありがとうございました。
2：は，よかったのかなー。(MYf)

「え」は，それ独自で，一定の表現価値を，行為としての価値を持つ。その点でフィラーとは言えない。それだけで，新規情報の定位が不調であることを示すことができる，確立した応答詞という面も持つ。

それに対して，「あ」は，対人的な表現価値はそれほど明確ではない。それだけでは特定の価値を持たない場合が多い。どちらかと言えば，情報への反応を示すものであり，反射的な面も持っている。言語行動以前のものであり，一定の意図に基づいたコミュニケーション行動の中で現れるものとも言えない面があるように思われる。しかし，電話での聞き手認定の「あ」などは，慣習的に一定の機能を持つようになっている。つまり，コミュニケーション行動内での価値を持つようになっているわけである。その点で，フィラーとしての性

格を持っているとも言える。

フィラーかどうかは定義の問題であるが，入力系のものと出力系のものでは，そのコミュニケーションにおける役割が異なり，より広くコミュニケーション行動に付随する現象を捉えるときには，この差異が念頭におかれるべきではないかと思う。同類とするよりは，差異をよりよく捉えることが重要であろうと思われる。

10　フィラーとフィラー化について——まとめをかねて

10.1　フィラー化の方向——フィラー形式の由来と機能の相関

ここまでの検討をまとめると，フィラーには，次のような機能の分化が見られた。

29. 出力系フィラーの区分と各フィラーの表示内容と機能

派生系フィラー
　指示詞＞発話内容の源泉の表示
　　この一・こう：話し手領域，実時間的な心内の内容
　　あの一　　：話し手領域
　　その一　　：話し手非関与領域（聞き手性，中間距離性）
　モダリティ副詞＞発話内容に対する姿勢の表示
　　まあ　：内容の暫定性（例示，見解，談話区切りの暫定性）
　　なんか：内容の不明確性（根拠，関連性の不明確さ）
　　もう　：内容への思い入れ（当然性，特筆性）
専用系フィラー（出力系）発話内容形成のためのスペース確保
　　えーと：心内の空白を埋める活動，心内の情報の消去→話題導入
　　えー　：流れに沿った内容を作るための心的スペース確保

専用系のものは，主として，発話形成のための心的スペースの確保という発話の組み立てに深くかかわるものである。それに対して，派生系のものは，その内容についての話し手の姿勢を実時間的に反映する。

派生系のうち，指示詞由来のものは，発話内容の源泉がどこにあるかを表す。コミュニケーションにとって，内容の源泉がどこなのかということは，対人的な観点からも重要な要素だろう。対人場面でなければ，おそらく「あの一」「その一」などが現れることはないからである。

一方，モダリティ副詞由来の主たる機能は，実時間的に発話されている内容について，それに対する話し手の姿勢を形成する，あるいは支えるということである。内容についての心的な姿勢を反映し，と同時に支え，ときに対人的な調整機能も担う。フィラーは，慣習化されることによって，談話標識として確立していくことにもなる。

これらを図式化すれば，広がりは，文を越えてコミュニケーション行動を支えるという方向に向かうものとして括れるようにも思われる。

30. フィラーへの広がりの方向
文内の要素 ＞ 対人的コミュニケーションの調整機能 ＞ 談話標識化

10.2 どのようにして広がるか——フィラー化の過程と条件

以上のように，フィラー化は進展したのであるが，本来の機能とフィラーとしての機能との異同を，図式的に示すと次のようになる。

31. フィラー化の過程での機能の変化と消失

[本来的用法]		[フィラーとしての用法]
指示詞由来フィラー		
指示対象の存在領域表示	→	発話内容の存在領域の表示
指示対象の存在	→	φ（消失）
モダリティ副詞由来フィラー		
命題内容・発話に対する姿勢表示	→	発話に対する姿勢の表示
統語的な位置づけ	→	φ（消失）

派生系のフィラーには，統語的な性格の変化が見られる。このような変化を起こす語が持っている条件を（十分条件にすぎないものであるが）観察すると，そこに次のような共通性が見られる。

32. フィラー化する語の条件
a. 自立要素であり，単独で機能すること。
b. 自立語とはいえ，孤立的な要素ではなく，なんらかの形で対応する要素を持っていること。
c. 対応要素との結びつきがゆるい，あるいはそれほど明確ではないこと。
d. 自立語ではあるが，内容語であるというよりは，話し手の姿勢を示す語としての性格を備えていること。
e. 意味的な面で，内容について感覚的な把握であることを示すこと。

以上を踏まえて，フィラーとして成立する過程を示すと次のようになる。

33. フィラー化の過程

対応する要素を持つ自立的機能語 ＞（対応の緩み）＞
対応要素の消失 ＞ フィラー化

10.3 フィラー化への動機付け

文法化，多機能化広がりの動機付けについては，先述のように，認知的なメカニズムと，社会的行為としてのコミュニケーションからの要求，この2つの方向から考えることができるだろう。

しかし，フィラー化については，その事情は異なるように思われる。フィラー化の場合，認知的なメカニズムとしての動機付けというものは考えることは

できそうもない。フィラー化というものは，ものごとを捉えようとするものではない。フィラー化が目指すのは，表現ではなくて，発話の基調の形成，維持であり，フィラー化の動因は，コミュニケーション行動の支援ということなのではないかと思われる。

このような支援が必要であるのは，発話処理に心的な負担がかかるからである。その負担には，認知的なものと，対人的なものと2つのものがある。

専用系のフィラーの使用には，基本的には前者（認知的負担）が関わっているが，派生系のものについては後者（対人的負担）が主たる動因となっていると考えられる。

「まあ」「なんか」などは発話内容についての断定を回避し間接化するという機能があり，そこにネガティヴ・ポライトネス・ストラテジーとしての機能が認められよう。また，とくに発話内容に必要でないものを加えるということそのものが，間接化，あいまい化の一つの手段ともなる。また，「あのー」などの内容領域標示も，コミュニケーションにおいて内容の源泉を明確にするという社会的なルールへの顧慮に基づいたものと見ることもできると思われる。

その中にあって例外的なのは「もう」で，ポジティヴな姿勢に基づいたものになっている。

10.4　再びフィラーの操作的な規定について

フィラー検討の最後に再び，フィラーの規定に戻る。前節で，「あ」「え」などをフィラーの枠からはずすという提案をした。このことも含めて，先に挙げた，次のようなフィラーの操作的規定を再検討してみる。

34．フィラーの操作的再規定

a．実時間的に発話やその他の行動に伴って現れる音声である。
b．それ自身は命題的な内容を持たないし命題とのかかわりも持たない。
c．文のモダリティ要素でもないしモダリティ要素との関わりを持たない。
d．談話標識（談話の組織を形成する要素）でもない。
e．単独では文としての価値を持たない。

この規定の不十分さは，「～でない」という形で表現されるものが多く，「～である」という規定がないという点に現れている。そこで，といって十分なものではないが，ここでは，次の項目を加えることを提案する。

f．当該の言語の中で，一定の音声形式を持つ。
g．出力時に，出力を支えるために（内容形成，調整，対人的な配慮と調整などのために）発せられる音声である。

10.4　今後の課題

以上，フィラー，フィラー化について検討してきたが，フィラーについての研究はこの30年ほどの歴史はあるとは言え，緒についたばかりである。フィラー研究の大きな目標は，人の言語行動全体のメカニズムの解明というところにあると思われるが，その前段階として，本研究での観察の妥当性を検証するためにも，次のような観点からの研究が必要であると思われる。3点ほど挙げ，締めくくりとしたい。

35. これからの研究の課題，方向

a. 実験によるフィラーの現われの検証

独り言でのフィラーのあり方，MRI などを使ったフィラーと発話との脳の活性化部位の異同の探索，など

b. 他言語におけるフィラーの検討

フィラー化する語彙の特徴を通言語的に観察する，日本語と同じ 3 つの指示詞を持つ言語（韓国語，トルコ語など）におけるフィラー化の観察，など）

c. 社会的な発達とフィラーの現われの相関の検討

言語習得（第 1 言語，第 2 言語）とフィラー習得の関係，など

今後の研究の発展を願う。

［文献］

池上嘉彦（2000）『「日本語論」への招待』講談社
加藤重弘（2004）『日本語語用論のしくみ』研究社
金水敏・田窪行則編（1992）『指示詞』ひつじ書房
工藤浩（2000）「副詞と文の陳述的タイプ」（森山卓郎・仁田義雄・工藤浩（2000）『日本語の文法 3 モダリティ』第 3 章，岩波書店）
定延利之（1991）「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版，227–260
定延利之・田窪行則（1995）「談話における心的操作モニター機構——心的操作標識『ええと』と『あの（一）』」『言語研究』108：74–93
塩沢孝子（1979）「日本語の Hesitation に関する一考察」，F. C. パン編『社会言語学シリーズ No.2 ことばの諸相』文化評論出版社，151–166
田窪行則・金水敏（1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』くろしお出版，257–279
田窪行則（1992）「談話管理の標識について」『文化言語学——その提言と建設』三省堂，1110–1097
田中敏（1993）「休止の意味論」『月刊言語』22-8：20–27，大修館書店
田中敏（1995）『スピーチの言語心理学モデル——音声の生産と意味処理の関係の実証的検討』風間書房
西阪仰（1999）「会話分析の練習——相互行為の資源としての言いよどみ」，好井裕明・山田富秋・西阪仰『会話分析への招待』世界思想社
仁田義雄（1991）『日本語の人称とモダリティ』ひつじ書房
沼田善子（1986）「取り立て詞」『いわゆる日本語助詞の研究』第 2 章，凡人社
野村美穂子（1996）「大学の講義における文科系の日本語と理科系の日本語——『フィラー』に注目して」『文教大学教育研究所紀要』5
深田嘉昭（2000）「日本語の分類辞『本』に関する一考察」早稲田大学文学研究科紀要 40：69–80
益岡隆志（1990）「取り立ての焦点」『日本語学』明治書院 9-5：4–15
松本曜（1991）「日本語類別詞の意味構造と体系：原型意味論による分析」『言語研究』99：82–106
森山卓郎（1989）「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1：63–88
森山卓郎・張敬茹（2002）「動作発動の感動詞『さあ』『それ』をめぐって——日中対照的観点も含めて」『日本語文法』2-2：128–143

山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
山本敏行・鈴木泰三・田崎京二（1999）『新しい解剖生理学改訂第10版』南江堂
横林宙世（1994）「『エート』『アノー』『マー』『エー』その働きと用法は？」『月刊言語』5月号，68–69
渡辺実（2001）『さすが！日本語』筑摩書房
Brown, Penelope & Stephen Levinson, 1987, "Politeness: Some Universals in Language Usage," *Studies in Interactional Sociolinguistics* 4, Cambridge University Press.
Hopper, P. J. & Elizabeth Traugott, 1993, *Grammaticalization*, Cambridge University Press.（ホッパー & トラウゴット著，日野資成訳（2003）『文法化』九州大学出版会）
Nagura, Toshie, 1997, "Hesitations (Discourse Markers) in Japanese."『世界の日本語教育』7：201–218

［用例の出典］
（データベース類）
「佐賀新聞新聞記事データベース」佐賀新聞社
「インタビュー形式による日本語会話データベース」（1995 年～96 年）北九州市立大学
（テレビ・ラジオ番組）
「NHK 囲碁選手権戦」NHK テレビ，2007 年 5 月 13 日放送
井上謙「横浜湘南を歩く」NHK カルチャーアワー，NHK ラジオ，2006 年 10 月 29 日放送
小林章夫「20 世紀イギリス文学の世界」NHK カルチャーアワー，NHK ラジオ 2007 年 6 月 25 日放送
「コラムの花道」『ストリーム』TBS ラジオ，2006 年 9 月 22 日放送
（その他）
色川武大（1984）「大喰いでなければ」『喰いたい放題』潮出版社

A study of the Semantic-functional Expansion of Modern Japanese Function-words

Keiichi KOIDE

The purpose of the investigation is as follows: (1) What are the motivations for multifunctionalization and to what directions the functional changes extend. (2) How about the fillerization which is another types of the change of the word functions.

For the investigation of multifunctionalization, 4 function wards are selected and for fillerization, 9 fillers are taken up.

As a result, some observations were gained. First, it is necessary for multifunctionalization that the words have some predicative characteristics, like "*-teki*", "*-poi*". These words will extend their functions by changing the syntactic categories. On the other hand,

non-predicative words, like particle "*mo*", classifier "*hon*", the syntactic characteristics will not change. Although "*hon*" extends its scope of application, they don't go out of the original syntactic characteristics.

In the background of the multifunctionalization, two motivations are recognized; cognitive motivations and communicative motivations. The former one is based on the fact that speakers are to grasp things through subjectified attitude, and the latter one is to express the speakers' modal attitude, both of which are motivated by the exposition of the speakers' own self.

Second, the paper showed some relations between the syntactic characteristics of words and the directions of changes.

The origins of fillers are divided into two types. One is those derivated from independent elements like "*ano*", "*maa*", and the other is the exclusive type like "*ee*", "*eeto*". From the point of functions in the utterance, the former type is to express the source of the content of the utterance and the modal attitude toward the utterance. On the other hand, the latter is to make a mental space for forming the content of the utterance. The one of the important functions of fillers is to maintain the ongoing utterance, and another is to adjust the relations between participants in the course of communication. Both the multifunctionalization and the fillerization have commonly the aspect of personal adjustment functions.

It is to be remained that the observations of this research will be investigated by comparison with other languages and through the psycholinguistic experiments.

Key words: extension of meanings and usages, filler, fillerization